

《若紫》

(前略：現代語訳中)

春は日も長いので、源氏はすることもなく退屈に感じ、夕暮れ時のずいぶんと霞んでいるのに紛れて、あの僧坊の小柴垣の所へお出かけになりました。お供の人々はお帰しになって、惟光の朝臣とおのぞきになると、そこに見えたのは、ちようどこの西側に持仏を据え申し上げてお勤めをしている尼でした。尼は簾を少し上げて、花をお供えしているようです。真ん中の柱に寄りかかって座り、脇息の上に経を置いて、ひどく苦しそうに読んでいる尼君は、普通の身分の人とは思われません。四十歳を過ぎたくらいで、とても色が白く上品で、痩せてはいますが、顔つきはふくよかです。目もとのあたりできれいにそいである髪の毛の端も、意外にも長いのよりずっと新鮮な感じがするものだなあ、としみじみ御覧になります。

きちんとした女房が二人ほど、あるいは子供たちが出入りし

て遊んでいるのが源氏の目に映りました。その中に十歳くらいであろうかと思われる、白い衣に山吹がさねなどのなじんだものを着て、走ってくる女の子がいます。その子が、たくさん見える他の子供とは比べ物にならず、美しい生い先が想像されるような可愛らしい顔つきなのです。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして、泣いてこすったのか、顔をととても赤くして立っています。

「いったい何事ですか。子供たちとけんかでもなさったのですか」

と言って、尼君が見上げた顔に、少し似ているところがあるのは、その女の子が尼君の子であるのかもしれないと、源氏はお思いになります。女の子は、

「雀の子を犬君が逃がしちゃったの。伏籠の中に入れておいたのに……」

と言って、とても残念そうに思っているようです。そばに座っていた女房が、

「いつものお調子者が、こんなことをして、お嬢様が悲しむな

んで、本当にいやですこと……どこへ行ってしまったんでしよう。ずいぶんと可愛く、だんだんできてきたのに……烏なんかに見つかったら大変」

と言いながら立つて行きます。髪はゆつたりとしてとても長く、見た目もなかなかの女であるようだ、と源氏は御覧になります。少納言の乳母と人が言うのから推察するに、この子の後見人のようです。尼君は、

「ああ、なんとも子供っぽいことですね。困ったことをおっしゃいますこと。私がこのように、今日、明日とも分からぬ命だというのに、何ともお思いにならないで、雀をかわいがっていらつしやるとは……。雀を飼うなんて罪作りなことだと、いつも申し上げているのに、情けない……」

とこぼして、

「こつちへおいで」

と言うと、女の子は尼君の前にちよこんと座ります。顔つきはとてもかわいらしく、眉のあたりがほんのりとしており、子供っぽく髪をかき上げた、額や髪の生え際がこの上なくかわいらし

く見えます。

「大人になっていくその姿をぜひとも見てみたい人だなあ」

と、源氏の目はくぎづけになられるのです。しかし、そう感じつつも、実は、自分が限りなく心を尽くし、お慕い申し上げる人に、本当によく似ているから、こうしてつい目を離すことができなくなってしまうのに違いないと、そう思う源氏の目から涙が落ちたのでした。

(中略…現代語訳中)

源氏は、

「何とも心引かれる人を見たなあ。こんなことだから、いわゆる色好みの男たちは、こんな忍び歩きばかりをして、ああいうめったにいないような女を見つけるのか。ちよつと出かけた私でさえ、こんなふうに思ってもみなかったような人に出会うのだから…」

と、感心なさるのでした。

「それにしても、本当に可愛らしい子だったなあ。いったいどういう素性の人なのだろう。あの方のかわりに、日々の慰めとして見ていたものだ」

と、思う心が、源氏の中に深くとりついたのです。

藤壺の宮は、体調を崩されるようなことがあつて、宮中を退出され、里に下っていました。父帝が、ご心配になり、泣き悲しみ申し上げていらつしやるご様子をも、源氏はまことにおいたわしく拝見しながら、せめてこのような機会にあの方にお会いしたいと、心も落ち着かずさまようのでした。どこにもお出かけにならず、内裏にいても里にいても、昼間は何か欠けてしまったような気持ちで物思いにふけて、日が暮れると、王命婦に逢瀬の手引きをおせがみになるのでした。

王命婦はどのような一計を案じたのでしょうか、非常な無理をして藤壺の宮とお逢い申している間さえ、現実とは思われなものは、なんとも辛いことではありませんか。宮も、思いもしなかつたあの夜の出来事をお思い出しになること、それだけでも一生の悩みであるのに、せめてそれだけで終わりにしなければ

ばと深く決心されていたにもかかわらず、再びこのような逢瀬を遂げるにいたってしまふ、そんな自分自身がとても情けなく感じられるのでした。源氏は、宮が普通でないご様子でありながら、離れたくないほどにかわいらしく、しかし一方では他人行儀なところもあり、奥ゆかしく気品のあるご態度などが、やはり普通の人とは似ていらつしやらないのを、

「どうして、この方には欠点というものが少しもお混じりにならなかったのだろう」

と、ふと辛いほどまでにお思いになるのでした。いったいこんな束の間の逢瀬で、どのようなことを申し上げきれるというのでしょうか。二人は鞍馬の山にでも泊まりたいというような様子でしたが、あいにくの短夜で、とても思い通りにはなりません。それは、逢わないでいるよりもかえって辛い逢瀬でありました。

お逢いしても再び逢うことの難しい夢の中で

そのまま消えてしまふわが身であつてほしいものです

と、涙にむせんでいらつしやる源氏のご様子も、さすがにお気

の毒なので、宮はこのように詠みます。

この上なく辛いこの身を人は語り草として語り伝えるのではないでしようか

永遠に覚めることのない夢の中のことだとしても

そうしてお悩みになっている宮の様子も、たしかにもつともなこと、恐ろしいほどに辛く思われます。

お直衣などは、命婦の君が取り集めて持つて来ました。

源氏はお邸にお帰りになって、泣き臥してお暮らしになっていました。源氏からのお手紙なども、宮は以前と同様、御覧にならないという返事だけがあり、いつものこととはいえ、源氏は辛さのあまり、抜け殻のようになられて、内裏にも参内せず、二、三日閉じ籠っていらつしやいます。そんな様子を見て、また、

「どうかしたのだらうか」

と、父帝が案じていらつしやるらしいのも、もしやと思われ、源氏は恐ろしくお感じになるのです。

藤壺の宮も、やはり本当に辛いわが身であることよと、お嘆

きになると、ご気分の悪さもまさりなきつて、早く参内なさる  
ようにとの御勅使が、しきりにあるのですが、それにお応えす  
る決心もできません。本当に、ご気分が、いつものようであ  
らつしやらないのは、どうしたことかと考えれば、内心思い当  
たることもありましたので、憂鬱なまでに

「いったいどうなるのだろう」

とだけ思い乱れなさるのです。

暑い日は、いよいよ起き上がることもおできになりません。

三か月におなりになると、誰の目にもそれと分かるようになり、  
周囲の人々が拝見し噂しますのです、ご自分ではどうにもならな  
いご運命について、心が痛むのです。人々は、思いもよらない  
ことですので、

「この月まで、帝にご奏上なさらなかつたとは、どういうこと  
か」

と、不思議にお思い申し上げます。ただご自分一人の御心には、  
はつきりと思ひ当たることもあつたのでした。

お湯殿などにも親しくお仕え申し上げて、どのようなことに

ついても、宮のご様子を存じ上げている、おん乳母子の弁や、命婦などは、不思議だと思うのですが、お互いに話題にすべきことではないので、やはり逃れ難かったご運命を宮は歩んでしまつたかと、命婦は一人恐ろしく思うのでした。

帝には、おん物の怪のせいと、すぐには表面に出ずにあそばしたように奏上したのでしようね。周囲の人もそうだったのかとばかり思っていました。帝は、ますます宮のことを限りなく愛しくお思いになつているのでしよう、御勅使などがひっきりなしにあるのですが、宮はその度にそら恐ろしく、物思いなさることと言つたら、休む間もないのでした。

源氏中将の君も、尋常でなく異様な夢を御覧になつたので、夢解きをする者を呼んで、ご質問させなされると、及びもつかないような思いもかけない方面のことを占つたのでした。占い師が、

「その中に、思い通りにならないことがあるので、慎みあそばすべきことがございます」

と言うので、源氏は不安なお思いになつて、

「これは自分の夢ではない、人の夢のことを言っただけだ。この夢が現実となるまで、他人に話すな」

とおっしゃって、心の中では、

「どうなってしまうのだろう」

と思いをめぐらしていらっしやいます。そんな折に、この女宮のご懐妊のことをお聞きになって、

「もしかしてこのことだったのか」

と、お思い合わせになると、ますます宮にお会いしたく思われ、言葉の限りを尽くしてその気持ちを申し上げなされますが、命婦もよく考えると、本当に恐ろしく、不安な気持ちが強くなつて、まったく逢瀬を準備する方法がありません。宮からのはない一行のお返事がたまにはあったのですが、それもすっかり絶え果ててしまいました。

七月になって宮は参内なさりました。帝にとっては素晴らしく喜ばしいことですので、ますますの激しい御寵愛ぶりは際限がないほどです。お体は少しふつくらとおなりですが、少しやつれ、顔がお痩せになっている宮の姿は、それはそれでまた、

本当に似るもののないほど美しいのでした。

例によつて、一日中、帝は藤壺の宮のもとにばかりお出ましになります。管絃の御遊びも徐々に盛り上がる季節なので、源氏の君をも常にお側にお呼びになりながら、お琴や、笛など、いろいろと奏でさせなさるのでした。源氏は、なんとかしてお隠しになっていますが、我慢できない気持ちが音に漏れ出てしまふそんな時には、藤壺の宮も、忘れられない事をあれこれとお思い続けていらつしやるのでした。

(現代語訳中…しばらくお待ちください)